教職大学院院生　M.H さん感想

学部や大学院での講義で、自殺や自傷行為、ストレスマネジメントについて考えたことがあり、知ったような気持ちでいた。しかし、このシンポジウムに参加して、例えば「死にたい」という気もちで押しつぶされそうになっている子の気もちに気づいたり受けとめたりするためには、力不足であることを痛感できた。

本日のシンポジウムでは、特に 3 つのことが私の心に残った。

1 つ目は、本橋豊先生がお話しされた、スクールカウンセラーの制度が充実してきていても、自殺は減少しておらず、むしろ増加しているという事実である。学校だけではなく、子どもたちを外部とつなげることで多方面から、子どもたちを見守ることは重要であるだろう。しかし、ただ外部と関わりをもてばよいのではない。学年、学校全体で子どもたちの情報を共有し、学校全体で見守る体制ができて初めて外部とつなげる意味があるのではないかと考えた。

2 つ目は、阪中順子先生のお話の中で紹介された、河合隼雄氏の「子どもから死を遠ざけるのではなく、死についての豊かなイメージをもたせる」という言葉である。私は、子どもたちに「死」を連想させるようなことは言わない方がよいのではないかという先入観をもっていた。しかし、最近は、「死」をテーマにした絵本が話題となった。色々な立場から「死」について考えることができるようになるなどの「死」に対する「豊かなイメージ」をもつことは重要であると考える。他にどのような効果があるのか、引き続き学びたい。

3 つ目は、吉川和代先生がお話しされた、ストレスマネジメント教育についてである。子どもたちの悩みや不安などの気もちが満杯になるまで溜めてしまうのではなく、少しずつそれを解消できるような方法を身につけることの重要性を改めて感じた。

春からは教師として、本日学んだことを生かしながら、子どもたち一人一人をよく見て、小さな変化を見逃さないような関わりをしたい。